

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 中国語母語話者による第二言語としての日本語のテンス・アスペクト習得

氏 名 西坂祥平

論 文 内 容 の 要 旨

本研究の目的は、中国語を母語とする日本語学習者による日本語のテンス・アスペクト形式の習得過程を明らかにし、習得上の問題点やその要因を探ることにある。特に日本語のアスペクト形式「ている」を中心に、「る」「た」「ていた」「ある／いる」との使い分けについて論じる。例えば、日本語学習者は(1)と(2)の下線部や、(3)～(5)の下線部の選択で迷うことがある。

(コップを手に取り、表面にできているヒビに気づいて)

- (1) あれ、コップが割れている。
 (2) ?あれ、コップが割れた。

(道を歩いていて、前方に何かを見つけて)

- (3) あ、財布が落ちているよ。
 (4) ?あ、財布が落ちたよ。
 (5) ?あ、財布があるよ。

これらの表現は、形式的あるいは意味的に類似しており、日本語学習者にとって習得しにくい項目である。

日本語学習者に見られる誤りを観察すると、学習者にとって使い分けの難しい類似したものである場合がある。上で挙げた2つの例も、学習者にとっては「類似したもの」であると考えられる。本研究で扱う「ている」の習得についても、「ている」を選択すべきときに「た」を選択してしまう誤用などが先行研究によって報告されているが、「ている」を選択すべきではないときに「ている」を選択しているかどうかという点についてはほとんど扱われていない。本研究ではこうした点についても論じる。

また、日本語学習者のテンス・アスペクトの誤用については、学習者の母語の影響によると主張する論考がある。

例えば、上の例（3）～（5）の場面において日本語母語話者は「財布が落ちている」というのが自然であるが、中国語を母語とする日本語学習者は「財布が落ちた」「財布がある」と言うことがある。これはこのような場面において、中国語では日本語の「ている」に相当するとされる“着”が使用できず、「た」に相当する“了”や「ある」に相当する“有”を使用するため、母語の影響によるという主張である。

（道を歩いていて、前方に何かを見つけて）

（6）財布が落ちている。（*掉着钱包。）

（7）?財布が落ちた。（掉了钱包。）

（8）?財布がある。（有钱包。）

しかし、母語の影響と結論付けるにはまだ十分な検証がなされてはいない。そのため、本研究では日本語と中国語の対照研究の成果に基づき、中国語母語話者の日本語のテンス・アスペクト習得において中国語の影響がどの程度見られるのか分析を行った。

本論文は、序論から結論まで全7章からなっている。

まず第1章では、序論として、本研究では中国語を母語とする日本語学習者による日本語のテンス・アスペクト形式の習得過程を明らかにし、習得上の問題点やその要因を探ることを述べた。

第2章では、日本語のテンス・アスペクト形式に関する母語の影響について概観した。次に、日本語と中国語におけるテンス・アスペクト形式の基本的な性質を述べ、最後に、日本語のテンス・アスペクトの習得に関する先行研究の問題点を指摘し、本論文の研究課題を提示した。

（研究課題1） 中国語を母語とする日本語学習者は、「る」「た」「ている」「ていた」の使い分けができるか。できない場合、使い分けの難易度の差に、母語はどのように影響しているか。

（研究課題2） 中国語を母語とする日本語学習者は、「ている」「た」「ある／いる」の使い分けができるか。できない場合、使い分けの難易度の差に、母語はどのように影響しているか。

続く第3章から第6章では、本研究の調査結果について論じた。

まず第3章では、まず Reichenbach (1947) の SRE 理論について説明した。これはテンス・アスペクトの意味を S (発話時、Speech time)、R (参照時、Reference time)、E (出来事時、Event time) の3点によって記述するもので、個別言語の枠を超えて使用される。そのため、汎用性の高い記号論的手法の、対照研究の観点から日本語のテンス・アスペクトの習得を説明するのに有効な理論である。本研究ではこの手法を用いて、先行研究の崔 (2009) では学習者の母語である中国語の影響

が十分に考慮されていないという問題点があることを指摘した。そのうえで、中国語のアスペクトマーカーの特性を考慮してタイプ分けした動詞を用いて調査紙を作成した。そして、中国語を母語とする日本語学習者 30 名と日本語母語話者 30 名を対象として予備調査を行い、その結果、ル形を選択すべきところでル形を選択できてはいるものの、テイル形の用法にかかわらず未来のことを述べる際には、テイル形の代わりにル形を使用するという傾向が見られた。さらに用法別、時点別に見てみると、「動作の持続」「結果の状態」両用法において「未来→過去→現在」の順に正答率が上がるという結果も得られた。日本語においては、未来の文脈において用いる形式と、現在の文脈において用いる形式がともに「ている」である。そのため、学習者にとっては、「ている」が未来の文脈においても用いられると言うことを認識しづらい。そのため「未来」の文脈における「ている」選択の難しさは、「現在」および「未来」を表すテイル形と、「過去」を表すテイタ形の形式上の違いに起因するものである可能性について報告した。

第 4 章では、中国の大学で日本語を学ぶ学習者 180 名と日本語母語話者 54 名を対象に行った調査結果を報告した。学習者の習熟度を測るテスト (SPOT) の結果をもとに、学習者を各 60 名の 3 グループに分け、1) 「る」「た」の習得状況と習熟度の関係、2) 「現在」「過去」「未来」の各時点における「動作の持続」と「結果の状態」の習得状況と習熟度の関係、3) 「結果の状態」習得の際の母語の影響と習熟度の関係について検討した。その結果、先行研究で「ている」の前段階に習得されるとされてきた「る」「た」に関しては、習熟度が低い段階から、選択の誤りが見られたが、習熟度の上昇とともに正答率は上がっていった。しかし、「現在」「過去」「未来」にかかわらず「結果の状態」における「た」、「未来」の文脈における「る」の選択傾向は上位群においても強かった。「動作の持続」と「結果の状態」における「現在」「過去」「未来」の間の難易度の差については、両用法ともに、未来=過去→現在の順に正答率が高かった。習熟度が上がるにつれて正答率が上がっていくのは、「現在」のみであった。「過去」「未来」の難易度の差は、テンスの関係を表す発話時 (S) と参照時 (R) のうち、R を S から切り離すことの困難さに起因すると考えられる。最後に、習熟度が異なっても、対応する中国語の動詞のタイプによって、「結果の状態」の難易度が変わることが明らかになった。タイプ 1 の動詞では、「現在」「過去」「未来」にかかわらず正答率は低く「た」の選択が多く、タイプ 2 の動詞では、下位群から正答率は高く、「た」の選択率も低い。このことは、「結果の状態」における母語の影響の存在を示すものである。

第 5 章では、「結果の状態」の「ている」と「存在」を表す「ある/いる」が類義関係にあると主張した陳 (2009) などの問題点を指摘したうえで、同一場面における日本語の中国語におけるアスペクト表現が比較可能な空欄補充タスクを作成した。そして、このタスクを用いて、日本語母語話者 58 名と中国語母語話者 136 名から母語データを収集し、同一場面における日本語と中国語の事態の述べ方を対照した。その結果、日本語話者が「移動動詞+ている」を用いる場面で、中国語話者は“有”だけでなく“了”も用いること、日本語話者が「状態変化動詞+ている」を用い、中国語で“着”が使用可能な場面で、中国語話者は“着”だけでなく“有”も用いることが明らかになった。この結果は、日本語が「ている」を用いて状態/位置「変化」と結果としての「状態」/「存在」を同時に言語化するのに対して、中国語は(“着”が可能な場合を除いて)「変化」

と「状態」／「存在」のどちらか一方のみを表すとする稲垣（2013）の分析を支持するものである。日中両言語でパラレルなデータを収集し、陳（2009）では明らかでなかった中国語における「ている」場面の表し方の実態を明らかにすることに成功した。さらに、庵（2010）が移動動詞と状態変化動詞のテイル形の違いに関して提案した「存在型」と「非存在型」の区別が、状態変化動詞のテイル形の分類にも有効であり、それが中国語の状態変化動詞における“有”と“着”の使い分けに反映されていることを示した。

第6章では、日本語学習者の「ている」「た」「ある／いる」の習得状況の実態を明らかにし、母語の影響の観点から検討するため、第5章と同様のタスクによる調査を上級日本語学習者31名に対して行った。中国語母語話者は、上級レベルであっても日本語母語話者が「移動動詞+ている」を用いる場面において、「移動動詞+ている」を用いることは困難であることが明らかになった。この場面においては、「ある／いる」あるいは「た」の使用傾向が見られ、先行研究の議論を踏まえて行った第5章の結果を裏付けるものであったと言える。その一方、日本語母語話者が「状態変化動詞+テイル」を用いる場面については、「存在型／非存在型」にかかわらず、中国語母語話者の高い「ている」使用の傾向が見られた。さらに、「存在型」の場面においては、第5章で得られた、「ている」の代わりに「ある／いる」を使用するという仮説を支持する結果であり、母語からの影響で説明可能であることを示した。

第7章では、本研究から得られた結論をまとめ、本研究の意義と今後の展望を述べた。

以上、本論文では、日本語のテンス・アスペクト習得研究における「る」「た」「ている」「ていた」および「ている」と「ある／いる」「た」との使い分けについて、母語の転移という観点から考察し、どのような動詞タイプがどのように使い分けに影響しているのかを明らかにした。具体的には、「る」「た」「ている」「ていた」の使い分けの難易度の差に、対応する中国語の動詞タイプ（“了”と“着”との共起可否）が影響していた。また、「ている」「た」「ある／いる」の使い分けの難易度の差が、対応する動詞タイプ、さらに「移動動詞／状態変化動詞」及び「存在型／非存在型」といった要因に影響を受けることを明らかにした。